# 柳生石舟斎

柳 生 石 舟 斎

昭和48年10月25日　初版発行
著　者・吉　川　英　治
発行者・吉　川　文　子
発行者・株式会社 六興出版
東京都文京区水道2－9－2
郵便番号 112
電話番号 東京(03)943－3431～3
振替番号 東京 92448

印刷　凸 版 印 刷
製本　手 塚 製 本
落丁・乱丁の本はお取替え致します

1973 Fumiko Yoshikawa, Printed in Japan. 0093-03002-9216

定価は帯とカバーに明記してあります。

# 目次

柳生石舟斎 3
小野忠明 71
林崎甚助 113
高橋泥舟 133
柳生月影抄 151
無宿人国記 201
牡丹焚火 257

柳

生

石

舟

斎

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

# 草廬の剣

## 一

新介は、その年、十六歳であった。

大和国神戸ノ庄、小柳生城の主、柳生美作守家厳の嫡男として生れ、産れ落ちた嬰児の時から、体はあまり丈夫なほうではなかった。

母なる人が、青梅の実に中って、月盈たぬうちに早産したせいだとか。——いわゆる月足らずの子であったとみえる。

『戦に出たい。戦に連れて行って下さい』

彼も、武門の子である。合戦のあるたびに父にせがんだ。

が、父の家厳は、

『そちのような弱い肉体では、戦いに出ても物の役に立たぬ。柳生の一族は、病弱な子まで狩り出したと、敵方に笑われよう。——そういう望みは断って、むしろそちは僧侶になれ、学問をしておけ。柳生家の累代、戦に次ぐ戦に、代々何十名の戦死者があったか数も知れぬほどだ。そちの兄、康太郎も二上山の合戦に討死した。叔父御もおととしの出陣から帰らなかった。……のう、そういう人々の霊を弔うべく、僧門に入るのも意義のないことではない。そちの体の生れつきひよわいのは、一族の中から一子はそれに棒げよとの、仏天のおいいつけかも知れないのだ。宿命というものである。いらざる憂悶は抱かぬがよい』

と、懇に諭すのであった。

『……』

新介は、黙って聞いているが、いつも涙をこぼした。顔を横に振るたび、その顔から涙が飛んだ。

『わからぬやつ！　女のくさったようなやつ！　嫌いだっ、彼っ方へ退がれっ』

果は、その涙へ、恐い顔を示して、家厳は大喝した。

それも、父性の大愛から迸しる声以外なものではない。

ところが。

ことし天文十三年の七月には、その父が好むと好まないに関わらず――子が望むと望まないに関わらず――否応のない戦火が、柳生父子を、一つ戦場に捲き落とした。

連年、鎬を削りあってきた宿敵、大和の筒井栄舜房法印順昭が麾下二十万石の領土の精兵を、挙げて、この小柳生ノ庄のわずか七千石足らずの小城ひとつを、取り巻いて、

『三日のうちに踏みつぶして見せる』

と、豪語し、そこの山上山下、野も畑も部落も、兵馬に埋めてしまったのである。

新介は、こうした危急が、わが家の石垣の下まで迫ったのを眺めやると、

『もう父もお叱りはなさるまい』

と、生れて初めての武者ぶるいを――恐怖の快感を、鎧の下の血は楽しむのだった。

そして、昼夜必死の防戦に、彼は搦手から水の手までの線を死守し、父の家厳は、一族と共に、専ら大曲輪の指揮に当り、時には自身、大手の木戸まで出て、士卒と共に奮戦していた。

## 二

石垣は血にそまった。

その血が黒くならないうちに、次の敵が、又石垣につかまって攀じ登ってくる。

岩石、材木、沸湯――糞泥までを、執念ぶかいその敵に浴びせかけた。

「多聞院日記」の記事によれば、この時の激戦は、三日に亘るとあるが、「柳生家譜」には、七日を過ぐとあ

る――

何にしても、相互、夥しい犠牲を出して、揉み戦った酸鼻は分る。

筒井勢は、小柳生の在家散郷へ火をつけたから、その煙りは、天を焦がし、畑はふみ荒され、百姓のすがたはおろか、家畜の影も絶えてしまった。

糧食の道、水の手の落口も、断たれてしまった。城中の兵は、眼に領内の焦土をながめ、身のまわりには、飢渇か死の影しか見られなかった。

が、猶も城は、頑強に落ちなかったので、筒井順昭は、自身伊賀を発して、忍辱山に陣を取り、

『これしきの城に、七日もかかって、なお落ちぬと四隣に聞えては、筒井家の名折れぞ』

と、激励した。

順昭は、後の筒井順慶の父にあたる人である。順慶とちがって、英武なる名将と知られていた。――その忍辱山の陣所へ、柳生方の捕虜が一名、高手小手に縛られて来た。

その晩も、諸所の放火、野火、陣地陣地の篝などで、夏の夜空は、真っ赤に煙って、地の草露に虫の音もなかった。

『坐れっ』

『それへ直れっ。――直らんかっ』

縄付きの弱腰を蹴って、一群の将士が、床几の前へ突きのめした捕虜を一目見ると、筒井順昭は、

『ああ待て。手荒にするな』

と、思わず眉をひそめずにいられなかった。

## 三

『女か。病人か』

順昭は、まず訊ねた。

見るからに弱々しい一名の敵を、大勢して、さも手柄顔に生擒って来た味方の将士も、むしろ不快とするような順昭の語気だった。

『わしは、女ではないっ。病人などでもないっ。――柳生家厳の嫡男、新介宗厳なのだ。はや首を打てっ。首を打て！』

順昭の声に応じて絶叫したのは、彼の部下ではなく、彼の前にひき据えられている捕虜だったのである。

『何っ。柳生家の総領じゃと』

順昭が、思わず眼をみはると、籠手の傷口を縛りながら、縄付きのうしろに付いて控えていた朝山氏堯という赭顔の勇将が、頭を下げて答え直した。

『幾度、水の手の樋を断ち切りましても、いつの間にか、城内へ水の通っている容子なので、それがしの手勢を伏せておきますと、夜毎、この若武者が、決死の一隊をひきつれて、搦手から裏山へ攀じ、貯水池の樋をかけ直し、水路をひいて城内へ走りこむのを見届けました。――で、こよいこそと、それがし自身、待ちかまえて、袋づつみにしましたが、若年とはいえ――又、見たところ、仰せの如く、病人か女のような弱々しい姿に似気なく、死にもの狂いに抵抗し、味方の兵を、八、九人まで斬りつづけました』

『……ふうム？』

順昭は、呻きながら、毅然としている捕虜の色白な面に、じいっと、眸をすえたまま聞いていた。

『――憎ッくい小冠者めがと、それがしが槍を突けると、それにおる野添盛八、漆間八郎右衛門の両人も、左右から力を協せて、追いつめ追いつめ、扇形の空濠の窪へ、敵が足ふみ外して転げ落ちたので――討つなと、野添の槍を止めて、引っ縛げて参ったのでござります。――縛め捕ってから気づいたのは、意外にも、それが城主柳生家厳の息子であったという事です。さして手柄とも存じませぬが、他ならぬ敵将の嫡子、君前に献げるのが至当と考え、物々しゅう思し召されましたろうが、ともあれこれへ引っ立てて来た次第でございまする』

『そうか。……いや、よく縛めて来た』

順昭は、初めの気色を改めて、

『小冠者、面を上げろ』

と、柳生新介を、睨めつけて、もう語気の端にも、不憫などはかけていなかった。

新介は、死闘に燃やした眸を、まだそのまま持って、容こそ、自若としていたが、

『面は上げておる。これ以上あげて、天を笑えというか。首を刎ねる際には、頸は伸ばすものと心得ておる。いらざる多言はお互いに無用であろう。はやく首を打てっ』

と、さすがに声は甲走っていた。

## 四

暁早い短夜。——濛々とこめる戦雲と朝霧に明けて、夜もすがら戦い通した籠城の兵に、ふたたび飢餓と、炎暑と、重い疲労が思い出された朝の一瞬。

『新介様あっ』

『若殿うっ。——若殿には、何処に』

搦手の兵たちが、大曲輪から大手の辺までを、血眼に、捜し合っていた。

それと同じ頃に、望楼の上では、

『敵が退いたっ。筒井勢は、いつのまにか、全軍退いて、今朝は、一兵も見あたらぬぞっ』

と、狂喜して呼ばわる声もしていた。

敵が囲みを解いて、総退却したという歓びと、同時に、城主の嫡男の姿が見当らぬという憂の声とが、黎明の一瞬に、齎らされたのであった。

城外の水の手付近で、新介についていた部下は、全滅していた。生き残った者も、割腹していた。——が、新介の死骸はなかった。

『……もしや?』

父の家厳を始め、城中の者が、挙って案じていた一つの推定は、その日の午の刻になって、不幸にも、適中していたことが知れた。

囲みを解いて引き揚げた敵の筒井城から、軍使が来た。



试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

『御子息の生命は、捕虜として預かってある。降伏人として、城池を出らるる場合は、御子息の身は返して進ぜる。――――御評議もあろう故、回答には、三日の猶予をお待ち申すであろう』

軍使は、すでに勝者の態度で臨んで来たのである。いずれを選ぶも随意と、あっさり告げて帰った。

帰った後、惨たる一族の顔が、大曲輪の一室に集まった。どの顔も、眼は落ち窪み、髪は茫々として、血や泥や汗のうえに、更に、濃い憂色に塗りつぶされていた。

『……どうするか？』

それだけの事だが、一致は難しかった。

家厳は、父として、心強くいう。

『生れながら、武門の後継とはなりかねる病弱な子だ。いつかは、僧門へ入れようと思い断っていた新介……。祖父以来の城池と名誉には更えられぬ』――と。

だが、一方。

親族の柳生河内、菅原夕菴、譜代の木村五平太、服部織部介、庄田喜兵衛次、和田、野々宮、松枝などの老臣旗下たちは、

『仰せではありますが、それは殿のお眼ちがいであり又、われわれ共も、昨日まで、まったく若殿を、お見損ね申していたので、今日となっては、断じて、新介様を見殺しにいたすわけには参りませぬ』

と、頑強にいい張った。

三日の猶予は、経ってしまった。しかも猶、家厳の意見と、臣下の意見は、一致を見なかった。家厳としては、生けるわが子を受け取っても、筒井家に屈する恥辱を受けるに忍びなかった。又、自分のみか、城中七百の忠勇な将士をして、敵の足もとへ、拝跪させるに耐えなかった。――どう考えても、武門を捨てて武人はない。そうしか思えなかったのである。

すると。

三日目の黄昏、一書が届いた。

大和生駒郡の筒井城からである。――が、書面は公式

なものではなく、又、敵からでもなく、そこに捕われている柳生新介から父へ宛てて来た私信であった。

## 五

敵の中にあるわが子。何を齎してきたこの手紙か。

――父家厳の手は顫かずにはいられなかった。

――が、披いて、一目、その文字の様を見ると、何か、彼はすぐほっとした。少しも字体が乱れていなかったからである。

文面の意味は、次のようなものであった。

父上。

さても人間とは明日も知れないものであります。きのうまで御膝下で甘えておりましたが、きょうは見も知らぬ敵方の中に、捕虜の身となっている事、ふしぎなる天命と、柔順に深思しております。

不覚とは思いません。新介は、最後まで戦いました。恥ともいたしません。勝敗は兵家の常です。一生は今日だけのものではありませんから。

むしろ私はこの天命を奉じて歓びさえ覚えています。生れて十六年、不孝のみ重ねてきたこの病骨が、今こそ幾分のお役に立つかと存ぜられます。新介はすでに討死なしたるものと思し召され、この身を筒井家の質となし、即刻、和議をお講じ下さい。

祖廟の地こそ、病骨の子ひとりよりは、大事な筈です。忠勇な家士の面々こそ、私一人などには代えられない柳生家の石垣かと考えられます。

どうぞ御善処ありますように。

さもあらばあれ新介も又、自ら生きゆく道を選んでゆくでしょう。御膝下を離れてむしろ今、人となる道を訓えられ、又、御両親様の大愛の一しお身に迫るものを新たに覚えておりまする。では呉々も、御自重のほどを。

筒井城内の短檠一穂の下にて誌す

新介拝

父うえ様

『……』

家厳は落涙がとまらなかった。玉砕を潔しとして主張していた一徹な愚さを、日ごろ病弱あつかいにしていた子から訓えられて、背に百杖を下された心地に打たれた。

『そうだ。いうが如く、善処いたそう。……新介の志を生かして』

評議の間へ出ると、老臣以下、まだ暗澹とそこに坐っていた。家厳は、面々が夜に入ったのも知らずにいる態を見て、

『燭を燈せ』

と、武士どもへいいつけた。そして、

『燭が燈ったら、一同これへ寄れ。ただ今、敵方におる新介から、かような書面が届いたに依って、改めて諮りたい』

と、新介の手紙を示した。

それを見て、泣かない家臣はなかった。或る者は、声をもらして嗚咽した。

『――就いては、わしの心も決した。この新介が手紙の文面を篤と見よ。降伏とは書いていない。和議を講じてくれとある。ここに新介の真意があるらしい。――降伏は受け難いが、和睦を結ぶなれば悪しかるまじ、その代りに、自分は質子として、筒井家に留まる――という存念と相見える』

評議は一決した。

新介の意を旨として、即刻、筒井家へ使者を送った。使者は、

『降伏は申し出ぬが、和議なれば応じ申そう。条件としては、嫡男新介宗厳様を、長く質子として貴家へお預け申すべしとの主人家厳が意見にござります』

と、口上で伝えた。

これでは、対等にひとしい返答である。筒井家の不満は明らかなように思われたが、意外にも、

『承知いたした。御提示の条件をもって、宿怨を水に

流し、改めて、隣交の誼を結び申そう』

と、筒井順昭は、一言に許した。

思えば危ない限りだった小柳生の城も——天慶以来つづいて来た柳生ノ庄七千石の領土も——為に、計らずも無事なるを得た。筒井家の属国的な位地に落ちたことはぜひもなかったが、ともあれ新介の身一つで、父家厳以下、多くの家臣までも、一応は滅亡の淵から救われた。

## 六

兵は強く、領土は広い。

覇業を成した人物だけあって、筒井順昭は、やはり一世の雄であった。

彼に足らないものは、子であった。女子のみが多いのである。一男は夭折し、その下の藤勝はまだ幼い。

『他家の質子ながら、新介ほどの嫡男があれば』

とは、彼がいつも独り思う事だった。

合戦に十分に勝っていながら、又、筒井家とは比較にならぬほど領地も狭いし兵力も乏しい柳生家と、対等に近い和議を容れたのも、捕虜として連れて来た新介の飽まで毅然たる態度と、一族を思う至誠に動かされた結果だった。

『藤勝。そちもちと、新介を見習えよ。いつまでも家臣共に甘やかされて駄々ばかり捏ている和子様であってはならぬぞ。新介の刻苦に見習うて、朝は夙に起き、馬術、弓道の稽古に励み、読書もせねばならぬぞ』

四年間。——新介が質子としてここに来てからいつか四年となる、——その間の彼の起居や修養ぶりに感じるたびに、順昭は、わが子にひき較べて、藤勝を訓戒せずにいられなかった。

『はい。はい』

藤勝は、ことし十五である。父の前では、非常に畏るが、駄々で懶惰で底意地がわるい。順昭の死後、領土をうけて、伊賀に本城を移し、筒井順慶と称したのは、この藤勝であった。

父から叱られるたび、新介の名が手本に出される。藤勝は、その反動で、城内に住むもののうちでは、誰よりも新介が嫌いだった。犬よりも下に新介を見蔑げていた。

この新介は、城内の片隅に、質子構えと称われる小さい一棟を当てがわれて住んでいた。戦国の世の慣いで、強国の城郭には、幾人も他国の質子が養われていた。

『弁之助。又、あの擒人の新介が、経文みたいな書を読んでるよ。石を投げこんでやれ、喧しいから』

藤勝は質子構えの墻を覗いて、供の近習にいいつけた。

『そんな事をなすってはいけません。およしなさい』

『お前が抛らなければわしが抛る』

小石を拾うと、止める間もなく、屋の内へ投げこんだ。

家の中で、石の弾ける音がした。しかし、読書の声は止まなかった。

『まだやっているな』

意地になって、三ツ四ツと投げこんだ。すると、墻の小門が開いて、

『悪戯をするのは何者ですか。そんな事をなさると承知しませんよ』

と、怒って出て来た者がある。

見ると、新介ではない。女である。しかも藤勝の姉にあたる由利女であった。

『あらっ？　……姉上は、何だって、質子構えになんか来ているんですか』

『いいでしょう。来ていても』

『いけませんよ。擒人のいる囲いなんか……おまけに、男の所へ、女のくせに』

『あなたこそ、今、何を投げたのですか』

『石さ、いけない？』

『なお悪いでしょう』

『大きなお世話』

『今日ばかりではありません。のべついろいろな悪戯をして』

『じゃあ、姉上ものべつに来ているんだな』

『お可哀そうではありませんか』

『誰が』

『新介様の事です。ですから、時折、お見舞いに来て上げるのです。其方だって、もし戦に負けて、敵方へ質子となって行ったら、どんなに思いますか』

『父上にいいつけてやるぞ。こんな所へ、女のくせに、遊びに来て。——弁之助。行こう』

姉には敵わない。藤勝はぷいとそこから立ち去ってしまった。

## 七

『父上。由利どのは、質子構えにおる柳生新介の所へ、時々、行っておりますよ。いいんですか、あんな所へ女が行って』

藤勝が、或る折、口を尖らして、順昭へ告げ口すると、順昭は、非常に怖い顔を示して、反対に叱りとばした。

『何をいう。由利は、学問好き故、新介がよく書を読むので、解らぬ所を質しに行くのじゃ。そちもちと、新介に就いて、学ぶがいい』

藤勝は又、新介の為に叱られた。

順昭は、すでに自分の末娘の由利を以て、密かに新介へゆるしていたのである。和睦して六年、柳生家との間も、其の後は至って円満なので、わが娘の一人を柳生家に入れ、それを機に、新介の身も、花嫁の輿と共に、柳生ノ庄へ帰してやろうと考えていたのだった。

父のそんな深い胸は知ろう筈もなく、藤勝は、それから四、五日後、新介が馬場から帰る途中に待っていて、

『おい、おい、擒人の新介。待て』

弁之助と二人で呼び止めた。

新介は、馬の稽古の帰りなので、身軽に扮装ち、少し



试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c